

# 獣医師生涯研修事業のページ

このページは、Q & A形式による学習コーナーで、小動物編、産業動物編、公衆衛生編のうち1編を毎月掲載しています。なお、本ページの企画に関するご意見やご希望等がありましたら、本会「獣医師生涯研修事業運営委員会」事務局（TEL：03-3475-1601）までご連絡ください。

## Q & A 小動物編

**症例：**犬，ミニチュアダックスフント，雄，11歳齢。  
**主訴・現症：**最近，右眼が左眼に比べ，大きくなり飛び出てきたとの主訴で来院しました。右眼外眼角の強膜部に腫瘤（図1）が認められました。

**病歴：**8カ月前に同右眼で前房出血及び眼圧上昇（32mmHg）がみられ，点眼薬等の内科的治療を行いました。その結果，前房混濁は残存するものの出血巣は吸収され，眼圧安定化（12～20mmHg）したため，約1.5カ月で治療を中止しました。

**質問1：**本症例に対する今後の診療指針（診断・治療など）を述べてください。

**質問2：**犬猫の眼に発生する増殖性新生物疾患（腫瘍）を分類し，眼球内の代表的な腫瘍を列挙してください。

本症例では，治療として眼球摘出術を実施しました。摘出検体の病理組織検査（HE染色）の結果は悪性黒色腫であり，腫瘍細胞は低分化型で，多数の核分裂像など

異型性が強く，眼球強膜を超えた浸潤性増殖がみられました（図2，3）。

**質問3：**犬の原発性眼球内黒色腫の特徴と本症例の病理所見を評価し，予後について述べてください。

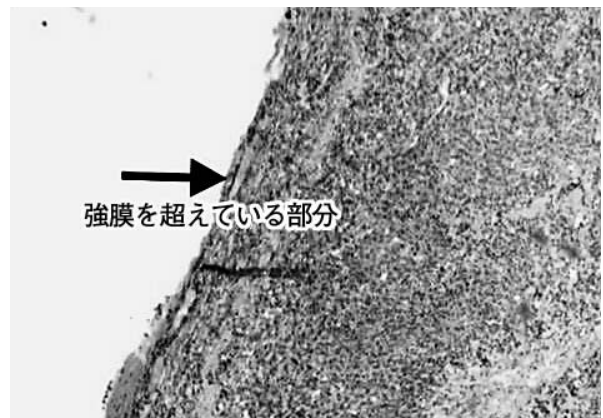


図2 病理組織像（弱拡大）  
腫瘍細胞は強膜を越えて浸潤している



図1 眼球の外貌

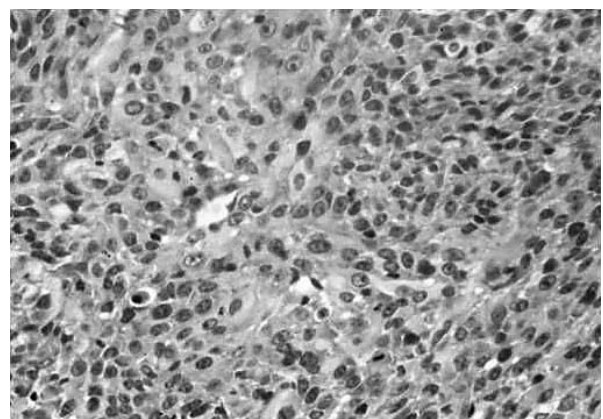


図3 病理組織像（強拡大）  
低分化型，強い異型性，多数の核分裂像

（解答と解説は本誌114頁参照）

## 解 答 と 解 説

### 質問1に対する解答と解説

本症例は、外見上、眼球の新生物疾患（腫瘍）が強く疑われます。診断を進めていく上で、他の腫瘍性疾患と同様に現在の一般状態（栄養・血液学的検査など）及び腫瘍による影響（リンパ節・他の部位への転移など）を把握することが必要です。また、眼球、特に眼内腫瘍という特殊な部位における特徴も考慮した診療指針を、飼い主に説明しなければなりません。

以下、眼内腫瘍における注意点を列挙します。

- ①眼内腫瘍が明確に確認される以前にぶどう膜炎、緑内障（高眼圧症）、前房出血及び失明などの症状を示すことが多く、眼球内の状態を観察することが困難です。このため、病歴の聴取及び超音波検査・CT/MRIなどの画像診断は有用となります。
- ②犬猫の眼内腫瘍においては、転移・近隣組織への波及を誘発することから、生検による細胞診は通常実施されません。
- ③腫瘍の形態学的な良性・悪性にかかわらず、①のような徴候を示すことが多いため、治療として眼球全摘出が選択されます。
- ④したがって、腫瘍・眼球摘出処置後の病理組織検査により悪性、良性の判別を行い、その後の治療の必要性を検討・説明します。

### 質問2に対する解答と解説：

眼球新生物と増殖病変の分類法は、文献・成書により異なっています。原発性または続発性などで分類しているものもみられますが、眼腫瘍の分類と反応は解剖学的部位によって強く影響されることから、WHOでは眼瞼部、結膜・瞬膜部及び眼球内と、3つの部位に区分し眼腫瘍を分類しています。

代表的な眼球内腫瘍（Intraocular tumors）としては、その大多数がメラニン細胞性腫瘍（Melanocytic tumors）であり、その他、虹彩毛様体上皮性腫瘍（Iridociliary epithelial tumors）、髄上皮腫（Medulloepithelioma）、虹彩毛様体嚢胞（Iridociliary cyst）があります。特殊な犬にのみ発生がみられる青眼の犬の虹彩紡錘形細胞腫（Iridal spindle cell tumors of blue-eyed dogs）、また、猫の眼外傷後に発生する猫原発性眼球肉腫（Feline primary ocular sarcoma, 創傷後肉腫 post-traumatic sarcoma）が報告されています。

### 質問3に対する解答と解説：

従来、黒色腫（melanoma）という用語は、あまり良性、悪性の区別無く用いられてきましたが、最近の文献・成書においては、メラニン細胞性腫瘍（Melanocytic tumors）の中で、組織学的に悪性であるものを悪性黒色腫（malignant melanoma）、良性であるものを黒色細胞腫（melanocytoma）と表現されることが多くなっています。

犬における眼球内黒色腫は、虹彩または毛様体（前部ぶどう膜）から発生することがほとんどで、人とは異なり脈絡膜からの発生はまれです。また、一般的に犬の眼内黒色腫の大半は、良性の挙動を示すといわれていますが、犬の眼内黒色腫症例を多数集めた疫学的・臨床的データは少なく、予後に関する報告はほとんどされていません。

組織学的な良性・悪性の判別では、悪性の腫瘍細胞は、古典的な退形成像を示すといわれていて、大型の細胞、核の不整形や多数の細胞分裂像などの所見と皮膚の黒色腫と同様に核分裂指数（Mitotic index）が、良悪の指標として重要視されています。また、眼球の構造的な特性として、眼球内に腫瘍が限局している場合、眼球は強膜によってかなり強固に包まれているので、周囲組織に浸潤することはほとんどなく、その治療として眼球全摘出を行えば、術後の病理組織検査で形態学的に悪性と診断されたとしてもその後の治療は必要なく、長期生存が望めるものと考えられています。

本症例の病理所見では、その腫瘍細胞は低分化型、強い細胞異型、多数の核分裂像がみられたこと、及び強膜を超えた浸潤性増殖からも非常に悪性度の高い眼内悪性黒色腫と言えます。したがって、放射線療法や化学療法など眼球摘出後の治療が必要な症例であると考えられました。

しかしながら、本症例は、飼い主の意向により術後化学療法を行わず、選択的COX-2阻害薬の内服のみを実施しました。術後4カ月で呼吸速拍を呈し、胸部X線検査で腫瘍が確認されました。その後、死亡したため病理組織検査を実施したところ胸部腫瘍は悪性黒色腫の肺転移と診断されました。眼球内悪性黒色腫の犬1例において眼球摘出後、臨床経過の追跡が可能で、遠隔転移が認められた貴重な症例でした。

キーワード：眼球内新生物疾患、眼球摘出術、病理組織検査、メラニン細胞性腫瘍、悪性黒色腫

※次号は、公衆衛生編の予定です